

造形科における「基本の練習」とその実践

お茶の水女子大学附属小学校 古市 憲一

1. 図画工作科から造形科へ

(1) 造形科改称の意義

本校では先導的試みの一つとして昭和51年4月「図画工作科」を「造形科」と改称しその基本構造と内容について研究を進めてきた。

造形の「造」は大漢和事典によれば「つくる、はじめる、きわめる」「とき、時代」の意がありさらにまた「天地自然の理法にもとづいて神が天地の万物をつくり育てる」とするまさに天地創造を意味する壮大な語意をもつ。

また「形」は古くは形と書いたとされ「井」は井戸の井で「泉、生命の根源」の意をもつ。また「彡」は「さん」と読み筆の毛並みのそろったかたちを示す。彡はまた「美しい飾り・いろどり・筆」の意をもつ。このことから「造形」は美しいいろどりをもったすぐれたものをつくりしあげる」との総意をもつこととなる。造形には形中心で色彩がないとか、工作中心で絵画の意が弱いなどといった見解がいかに浅見で不見識であるかはこのことをもってしても十分に言い得る。

「絵画製作、図画工作」といった矮小な概念にとどまる限り幼児や小学生の創造活動は作品中心の結果主義におちいり、「生の歓びをうたいあげ、美しいいろどりを極め込む活動」への転換ははかれない。

「名は実の資 — 名を正さなければ実は改まらない」と言われているが如く「名」をないがしろにして「実」が成るはずはない。山形寛著「日本美術教育史¹⁾」によれば「昭和21年9月、文部省でもいろいろ論議をして図画工作科というような二つくっつけたような名称は面白くないとは誰れもが思ったのであるが、なかなか名案がうかばず、美術科というような名称も候補に出たが、これはある中学校長などから“美術科とすれば図画の方はやるが、工作の方はやらなくなるがそれでもよいか”との意見が出て、“それでは困る。これから工作の方も盛んにやらなければならないのだから”というので美術科案はつぶれた。山形は「造形科」という案を強く押したのであるが、まだ一般には耳なれていないとの理由で否決されてしまった。このようにして日本名未決定のまま、コースオブスタディの完稿をみた昭和22年2月を迎え、止むを得ず、よい名が見つかるまで「図画工作科」としておくことになったのである。」と図画工作なる名称がよい名が見つかるまでの仮名としてのスタートしたいきさつを詳述している。

当時、省内にあって「造形科」を推した山形氏の実見性に注目すると共に以後40年近くいまだに仮名のまゝにおかれている現状を直視した上で臨教審教課審を核に大きな教育改革が進めら

れようとしている今（昭和60年代前半）こそ、この科の教育のもつすぐれた特性を象徴する教科名に改めて、名実共に個性尊重の教育の一端を力強くになっていく必要があると確信する。

(2) 造形科の基本構造

本校の造形科ではその基本構造を下図のごとく設定して平素の学習を進めている。²⁾

造 形 科	A 表 現	自由 表 現	柱	活 動	芯		
			1. 自由	自由に絵をかく (含 版表現)	描くものを生き生きと心にうかべる ○ 想いを豊かにめぐらせる ○ あったことを豊か おもいだす		
			自由	自由に立体をつくる	つくるものを生き生きと心にうかべる 生命感をとらえる		
	+	+	現	自由	自由にものをつくる	つくるものを生き生きと心にうかべる ○ 想いを発展させながらつくる ○ 素材の扱いになれ遊び楽しむ	
				3. 基本 の 練 習	練習 1. 発 想 2. 線 描 3. 色 彩 4. 形の組み立てⅠ(平面) 5. 形の組み立てⅡ(立体) 6. 材料・用具の扱い 7. 知 識	1. 高質の発想を数多く出すための練習 2. 高質の表現をするための線描の練習 3. 色の性質, 配色の効果を表現に活かす練習 4. 並べから変化と統一に至る造形原理と 5. その活用法を練習する Ⅰ平面 Ⅱ立体 6. 高質の表現のため材料と用具の扱いに慣れる 7. 表現を深め高めるための知識をもつ	
	B 鑑 賞	+	+	現	2. 目 的 的 表 現	ものをみて絵をかく (含 版画)	ものの変化を心でとらえる ○ 対象の見方を深める ○ 版表現の楽しさを実感する
					もの	ものをみて立体をつくる	ものの量感, 質感, 生命感をとらえる
					デザイン	デザインする	美しさともものとしてのはたらきを統合する (平面) (立体)
					目的	目的をもってつくる (創活, 合料と関連)	飾るため, 伝えるため, 使うために つくるものを豊かに想定し丈夫につくる
	賞				4. 鑑 賞 活 動	自 然	大自然の美しさを実感する
日用品, 芸術作品					日用品, 芸術作品(絵画, 彫刻, デザイン 工芸, 建築等)の美しさを感じとる		

「A表現」を「自由表現」「目的表現」と大別しその中間に表現的色あいを強くもった「基本の練習」をおく構造にした。「基本の練習」で把握した「基本の力」が自由表現, 目的表現の両

方に効果的に作用することを願っての位置づけである。

鑑賞も造形科では重要な学習の柱である。大自然の美しさを直接体験させる「自然」の鑑賞，日用品にみられる用と美の調和，世紀を超えて保全されてきた人類の至宝名画名作，建築遺跡等の鑑賞，これらは時間の許す限り学習の中に活動的に組み込む。

「基本の練習」は意図的な練習を通して表現に必要な基本的な力を児童一人一人に身につけさせるのがねらいであるが，それが表現に有効適切に作用し表現の質を高める作用を及ぼすことが第一義的な目的であることは言うまでもない。

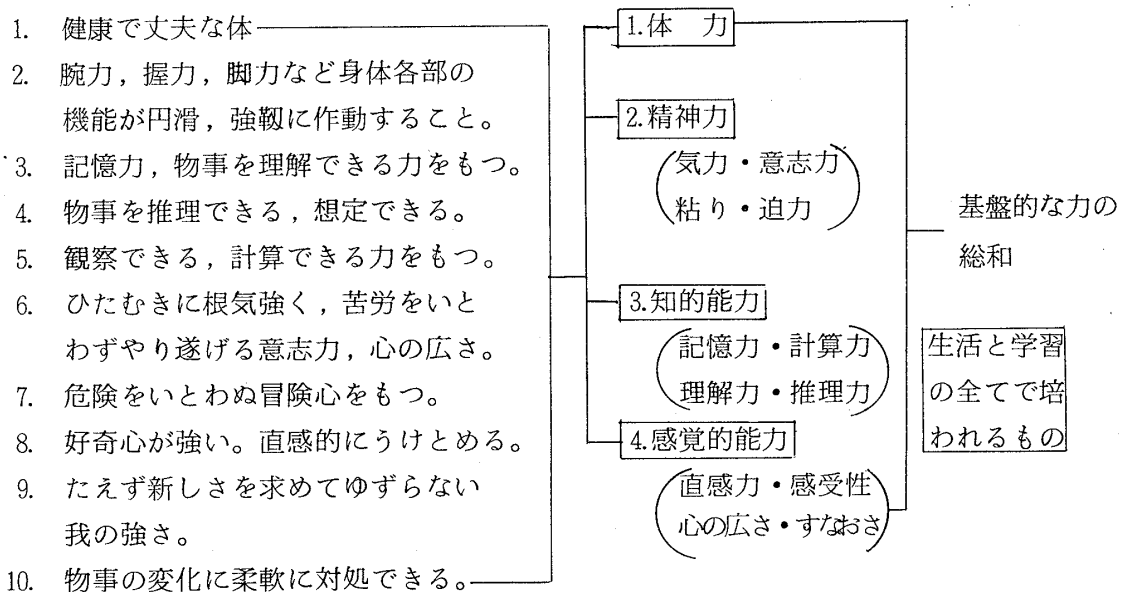
2. 造形の基礎・基本

(1) 基礎・BASIC・とは何か

「基本の練習」の内容を明示するには何が「基本」なのか，その全体像をつかむ必要がある。また「基礎」と「基本」のちがいについても明確にしておく必要がある。

基礎とは造形表現を行うために欠くことのできない「もとなるいしずえ」と解釈し，表現を大きく築きあげるためにあらかじめ用意する土台を示す。⁽⁴⁾

土台になるものは「体力」「精神力」「知的能力」「感覚的能力」の4力であると私は考える。この4力は造形だけでなく児童の全ての生活，遊び，学習に深くかかわる基礎でもある。造形の



造形の基礎(4力10要素)

基礎は造形も含めてあらゆる学習の基礎にもなる。このことから造形の基礎を培うこととは遊びも含めて児童の生活を充実させること，学校での全ての教科の学習に努力を傾けることである。つまり社会，学校，家庭 いずれにおいてもその生活を強化充実させることが造形の基礎を培うことになるのである。

(2) 基本・FUNDAMENTAL・とは何か

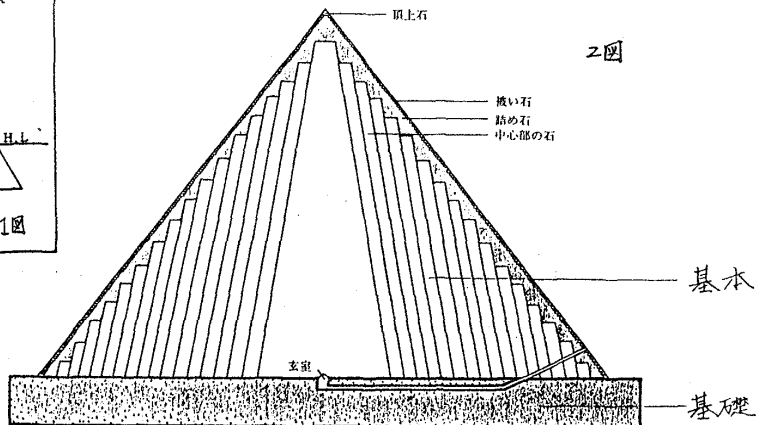
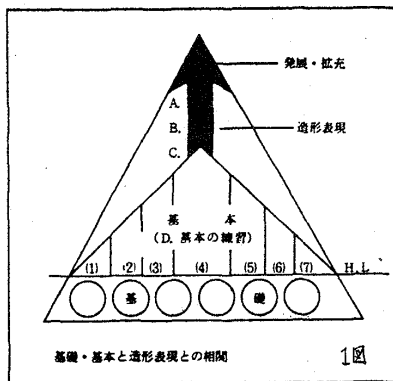
「基本」とは、ある物事が成立する根本、体系の中心をなすものと解する。それは主要で重要な体系の中心をなすもの、建築に例をとれば基礎の上に立てられる「柱」のことを意味する。

造形では表現そのものが将来にわたって連続的に発展充実していくための「基本的な柱」、表現を支える柱、芯柱を指すと考える。その基本を次のごとく7分野に分けて考えている。

- | | | | | |
|-----|-------------|---|-----|------------|
| 基本1 | 発 | 想 | 基本5 | 形の組み立て(立体) |
| 基本2 | 線 | 描 | 基本6 | 材料・用具の扱い |
| 基本3 | 色 | 彩 | 基本7 | 知 識 |
| 基本4 | 形の組み合わせ(平面) | | | |

これら7本の柱は造形表現を水面下で支え児童に豊かで力強い表現を保障する芯となる。

基礎と基本の関係を図示すれば1図のようになる。ピラミッドを例にとるならば平らに削られた岩盤が基礎にあたりその上に積み重ねられた中心部とそれを取り巻く石柱群³⁾が基本に相当する(2図)



ピラミッドの中心部の石柱にあたるのが基本1～7であると共に「心象・思考」「造形内容」「技術」もそれに相当する。上記の基本1から7までは造形表現上の方法的・表現行為的な色彩が強いがそれにくらべてこの三内容は造形の内容論、本質論からみた基本である。内容と方法は造形では常に一体であり方法なくして内容は表現され得ないし内容がなくては豊かな表現には成り得ない。

内容と方法は常に相互に影響を及ぼし合いながら表現は進む。三内容の詳述⁴⁾は本論では避けるが、基本的内容つまり学習内容の基本、本論での「基本の内容」をたばねる大きな観点であることは言うまでもない。創造的で発展的な造形表現に次かせない内容そして大きな飛躍のためにマスターすべき三つの基本的内容とそれを実現するための方法上の基本(上記基本1～7)の両

者を意をせてはじめて「基本の内容」と定義づけることができるのである。

(3) 基本の内容の重要性

前述したごとく基本の内容の二面性について概説すると次のようになる。

1. 内容論的な立場からみた基本

- 心象・思考 —— この場合の心象は感情を含んだ心象，思考は意志を含む。
- 造形内容 —— 具体的な指導内容，飛躍のための具体内容。

2. 方法論的な立場からみた基本

- 発想 ○ 線描 ○ 色彩 ○ 形の組み合わせ ○ 形の組み立て ○ 材料用具の扱い ○ 知識
- 技術 —— 発展的・独自の技術も含む

こうした基本は単独では存在しない。また単独では意味がない。相互に深く関係しあって存在する。心象とは心象でありイメージである。イメージは発想・構想・表現に深くかかわり線描や色彩をも強く支配する。

思考は判断や決断を常に迫られる表現の世界では欠かせない知的な精神作用である。判断や決断の前には必ず存在するのが思考である。思考は知識や技術と深くかかわり合っている。

造形内容はこれまで「教えすぎる」「教えない方がよい」等と議論が集中してきた部分であり、学習の具体的中味を指し示す。これを児童にもたせればそれぞれに新境地が開け新しい飛躍につながるといった役割をはたすのが造形内容である。これは方法論的な基本の全てに関連する。技術も表現には欠かせない要素である。そして線描，色彩，形の組み合わせ，組み立て，材料用具の扱い等広い分野で多くの基本と関連する。

これまでこの教科の存在力が弱いとされた原因の一つに「基本の内容」が明示されなかったことがあげられる。示せば膨大な内容があるのに、底知れぬ深さを恐れてか避けて通ってきたきらいがある。画塾等と異なり公教育では児童の全てに豊かな造形力を保障していく責任がある。特定の素質のある児童だけが豊かな造形力を発揮するというのではなく学級の全員が「活力に満ちた表現」を実現する方向に導くのが公教育の責任でもある。そのためには「基本の内容」を具体的にわかりやすく表示して全ての教師が活用できるようにすることが重要である。

教師はそれをもとに創意と工夫を加味して指導を展開すれば、マンネリ化した固定的な指導等も行われる筈もない。「基本」の内容を具体的に明示することがまずなによりも重要であると考えたのはそのためである。

3. 基本の内容

(1) 基本の内容の表示（図示）

本研究では基本の内容をどうとらえているか，論述する前にその具体例をまず示したい。

学年	1	表現	柱	目的表現	内容	ものを描いて絵をかき	題材 (例)	・ぼくの顔・私の顔 ・先生とぼく
学習の心								
描く対象の特徴を心にとらえる。対象の感じを表す。								

心象画・思考画

直感の増幅
焦点化

連想の捉獲

既存経験の起用

思考の柔軟性
・常識を超える
・前列に描かない
・角度を大きく
・次元から考える

異論を強い
家親しよと対峙
決断力

よいものを求めよ
求めた後
誠実な模索

持続して
任事に没頭し
余念がない

夢中
侍統
追求

「よし！ 決めていこう。」
はっきりと決める力

「ぼくは、先生とぼくは、
新しいものを
求めよう。」
ぼくは、先生とぼくは、
新しいものを
求めよう。

造形要素画

1. 画面の中に大きく描く。
描くものを井戸敷のようになく感じて描く。
・大きい。
・強弱が
・速さが
・速さが
・速さが

2. 画面の上下左右が
よく見え、中心に描く
ものがよく見える。
・画面の上下左右が
よく見え、中心に描く
ものがよく見える。

3. 画面の中心に描く。
全体をかく。
・一部分が画面から
はみ出ている。
・一部分が画面から
はみ出ている。

4. 画面の中心に描く。
全体をかく。
・一部分が画面から
はみ出ている。
・一部分が画面から
はみ出ている。

5. 画面の中心に描く。
全体をかく。
・一部分が画面から
はみ出ている。
・一部分が画面から
はみ出ている。

6. 画面の中心に描く。
全体をかく。
・一部分が画面から
はみ出ている。
・一部分が画面から
はみ出ている。

7. 画面の中心に描く。
全体をかく。
・一部分が画面から
はみ出ている。
・一部分が画面から
はみ出ている。

8. 画面の中心に描く。
全体をかく。
・一部分が画面から
はみ出ている。
・一部分が画面から
はみ出ている。

技法画

1. フォトペン (油性 水性) を鉛筆のよう
に持ってしかりと形がわかる。
・乱暴でしかり筆は筆は絵を荒廃させる。

2. 色以上を混ぜてぬる。
色と色がまざるようにぬる。
・色以上を混ぜてぬる。
色と色がまざるようにぬる。

3. クレヨンで使った材料である。
画面の中心は気にしないこと。クレヨンへの力の
かけ方で濃淡が自在にできることもわかってくる。

4. 色以上を混ぜてぬる。
色と色がまざるようにぬる。
・色以上を混ぜてぬる。
色と色がまざるようにぬる。

5. 色以上を混ぜてぬる。
色と色がまざるようにぬる。
・色以上を混ぜてぬる。
色と色がまざるようにぬる。

6. 色以上を混ぜてぬる。
色と色がまざるようにぬる。
・色以上を混ぜてぬる。
色と色がまざるようにぬる。

7. 色以上を混ぜてぬる。
色と色がまざるようにぬる。
・色以上を混ぜてぬる。
色と色がまざるようにぬる。

8. 色以上を混ぜてぬる。
色と色がまざるようにぬる。
・色以上を混ぜてぬる。
色と色がまざるようにぬる。

これは1年・表現・目的表現・ものをみて絵をかくを例にとった「基本の内容」の表示である。心象面・思考面の表示での○は心を表し◎は心の中に求める内容を、中心に位置する□は思考面での内容をそれぞれ表示した。造形内容面・技術面についてもこれが全てであるとは思わないが1年生ではこうした内容が学習の基本となりこれらをもとに強弱をつけ変化をつけ指導する教師の選択や意志をも加味して実際の指導が展開される。

自由表現でも18P, 目的表現でも24P, 鑑賞活動でも12P, 基本の練習で7P, 合計すれば61P(B4版1頁分の表示を1Pとして)つまりB4版61頁分, 項目数では, 1頁平均20項目として1220項目にも及ぶ膨大な内容がある。基本が1口に言い表わせないほど奥の深いものであることがこのことから推量される。1学年平均にして200項目, これだけの内容をもつ奥の深い教科これが造形なのである。これまで, 「のびのびと」「いきいきと」「子どもらしく」といった指導の哲理が重用されてきたのもこうした膨大な基本を一口にまとめることばとしては他に適当なものがなかったからであろう。

これからはこうした描象的でわかりにくいことばにとって代わって基本の内容が教師の目にもはっきりと読みとれ理解の糸口になるものとして全ての児童に学習の中で示されそれがベースになって大きな飛躍をとげる創造的活動が展開される日々がくるであろう。

(2) 基本の内容からみた学習時間数

前述した如く基本の内容の「内訳」を表示したことによりそれを学習として成立させるための時間数算定の基準作りができたといえよう。本研究によって算定の基準づくりはほゞできたと考えている。学年平均200項目という内容を消化するには現行配当時数週2時間では到底こなし得ないことは明白である。「造形の時間」は各学年週4時間は最底必要である。

4. 基本の練習 — 基本の内容を把握定着させるための練習とその方法 —

「基本の内容」をどのように児童に把握させていくのかその方法論をもたない限り「基本」は絵にかいた餅に終わろう。方法論の一つとして拙論では「基本の練習」を打ち出し牛歩ではあるがすでに10年間にわたって実験研究を進めてきた。

基本の把握には練習が必要であると考えたのは, 平素の学習での表現の華麗さ, 楽しさや喜びに幻惑されて肝心の基本のおさえが不徹底に終わることが多いという反省からである。

線描なら線描という基本的な内容にしぼって練習していく時間を設定することは「自由に絵をかく」「ものをみて絵をかく」「デザインする」などの学習に少なからず影響を及ぼす。例えばフリーハンドで横に直線が抵抗なく描けることが練習によって成就したとすればこうした学習に好影響を及ぼすことは明白である。

練習を冷たい押しつけ, 無機的操作にしないためには「理想性の投入」「冒険性の投入」が是非共必要であることは本研究で明らかにした重要なポイントである。その意味では練習そのものが理想性, 冒険性に富んだ表現にもなっていることが強調される。生命感のある練習, スリルとサスペンスに富んだ練習, 喜びと驚きにあふれた練習, これこそ「基本の練習」の基本であると言

えよう。本研究では練習の具体的な実験例の中から選択して20例をあげているがいずれも夢想性と冒険性を色濃くにじませている。この報告ではそれが紹介できないのが残念であるが練習2「線描」の内容表を提示してご批判を仰ぎたい。⁵⁾

基本の練習1. 「線描」の内容

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
	<ul style="list-style-type: none"> 左から右に向けてひいた直線を何本も並べてかく (クレヨン、パス) 上から下に向けてひいた直線を並べてかく (同上) 円形の曲線を並べてかく (同上) 波上の曲線を並べてかく (同上) 	<ul style="list-style-type: none"> 左から右に向けてひいた直線をおよそ等間隔に並べてかく (クレヨン) 上から下に向けてひいた直線をおよそ等間隔に並べてかく (同上) 一つの円の中心に5つの同心円をかく (同上) 一つの四角形、三角形の中に5つの四角形、三角形をかく (同上) 	<ul style="list-style-type: none"> おおよそ直角する直線を並べてかく (クレヨン、鉛筆、サインペン) 右上から左下に向けて斜めに直線を並べてかく (同上) 左上から右下に向けて斜めに直線を並べてかく (同上) コンパスで円をかく、同心円をかく ものさしをつかって左から右の方向に、上から下の方向に直線を並べてかく (鉛筆) 	<ul style="list-style-type: none"> 一つの点を中心に交鎖する直線をかく (クレヨン、鉛筆、サインペン) ものさしを使って直線を平行に並べてかく よこ たて 直交 正方形の中に対角線をかく その中に約直角に交わる線をかく (同上) ものさしで斜め上からみた立方体直方体をかく (平面の平行、垂直、鉛筆、サインペン) 	<ul style="list-style-type: none"> 平行線をかく たて よこ ななめ (サインペン、鉛筆、毛筆) 円の中にいくつもの同心円をかく (同上) おおよその楕円の中にいくつもの楕円をかく (同上) ものさしを使って正しく正方形、長方形、正三角形をかく (鉛筆) コンパスで円をもとにして正六角形をかく 正五角形をかく (同上) 	<ul style="list-style-type: none"> おおよそ正しく正三角形、正方形、長方形、円をかく (サインペン、鉛筆、毛筆) おおよそ正しく平行線をかく たて よこ ななめ (同上) ものさしで線対称点対称の図形をかく (鉛筆) ものさしで縮図、拡大図をかく (同上) ものさしで角柱、円柱、円錐、角錐をかく (同上)

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
対応練習	クレヨン、鉛筆	本、ノート、菓子、石、花	草花、草、木の枝	箱、果実、樹木	びん、筒、容器、樹木	缶、コップ、花びん、樹木
	シャボン玉、大波、小波	私がつくったケーキ、菓子	空想の花、木	空想の橋や塔	未来鉄道、宇宙船	未来建築、宇宙飛行体

注

- 山形 寛「日本美術教育史」黎明書房 昭42 P774
- 古市憲一「造形科の基本構造とその内容」お茶の水女子大附属小 P22
- デビットマコーレイ「ピラミッド」岩波書店 1981年 P11
- 古市憲一「児童期の造形表現能力を高めるための基礎的・基本的内容の抽出とそれを適切に把握させるための練習方法の開発」文部省研究報告書(昭58.59)
- 大橋皓也「子どもの発達と造形表現」2章2節P86～P126 開隆堂